
パニック

KEI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パニック

【Nコード】

N7517H

【作者名】

KEI

【あらすじ】

7月中旬、アメリカ西部郊外に位置するテネシー山岳地域にある小さな集落【スウェーブ村】にて連続失踪事件が起きる。事態を重く受け止めた地元警察は州警察の特殊部隊に応援を頼むが、現地捜査に派遣された特殊部隊メンバーまでもが2日後に山中で消息を絶つてしまう。国家エージェントの【カイル・バートン】はこの連続失踪事件の調査を任せられ現地に赴いた。カイルは現地地理に詳しいスウェーブ村の保安官【ボリス・マーマイン】と行方不明中の少年の姉【ケリー・ウェルズ】らと共に山岳の調査を開始する。やがて山の

中腹までたどり着いた彼らは不気味な洞窟を発見し、すぐさま洞窟内部の搜索を開始するが・・・

パニック

（ストーリー）

夏も盛りの7月中旬、アメリカ西部郊外に位置するテネシー山岳地域にある小さな集落【スウェブ村】にて連続失踪事件が起きる。事態を重く受け止めた地元警察は州警察の特殊部隊に応援を頼むが、翌日から現地捜査のために派遣された特殊部隊メンバー5名までもが山に入ってから2日後に消息を絶ってしまう…

州特殊部隊5名が消息不明になってから2日後、国家エージェントの【カイル・バートン】はこの連続失踪事件の調査を任せられ現地に赴いた。

カイルは現地の地理に詳しいスウェブ村の保安官【ボリス・マーマイン】と行方不明中の少年の姉である【ケリー・ウェルズ】ら共に3人で山岳の調査を開始する。

やがて山の中腹までたどり着いた彼らは不気味な洞窟を発見し、すぐさま洞窟内部の搜索を開始するが…

――人里離れた山奥に突如現れた謎の洞窟…。どこまでも続く暗闇の地下世界で主人公達に次々と襲いかかってくる恐怖の人型未確認生物！彼らは無事にこの恐怖の洞窟から脱出できるのか…

※この作品はフィクションです。登場する人物、団体、地名などは実在しません。なお作中には暴力シーン、グロテスクな表現が含まれます。

登場人物 紹介

～主な登場人物～

【カイル・バートン】

〔年齢…32歳〕 〔血液型…A型〕 〔性別…男〕

アメリカ合衆国の国家エージェントで、類い稀なる運動神経とタフな精神力を併せ持つ正義漢。今回、連続失踪事件の調査を任命され遥々ワシントンからスウェーブ村へとやってきた。

【ボリス・マーマイン】

〔年齢…46歳〕 〔血液型…O型〕 〔性別…男〕

ワイルドな口髭が印象的なスウェーブ村で唯一の保安官。かなりのガンマニアで狩猟が趣味。子供の頃からスウェーブ村で育ち、辺り一帯の深き山岳地帯の地理にとっても詳しい。村で相次ぐ連続失踪事件の調査にやって来たカイルに協力する為、行動を共にして今回の事件に巻き込まれる。

【ケリー・ウェルズ】

〔年齢…24歳〕 〔血液型…A型〕 〔性別…女〕

スウェーブ村出身の明るく気丈な女子大生。弟や友人達が失踪したという連絡を聞きつけて、スウェーブ村に帰って来た。村で偶然出会ったカイル、ボリスと共に事件の調査に半ば強引に協力する。幼少のころはガールスカウトに、現在は大学で医学を学びロッククライミングサークルに所属している。

【謎の男】

特殊部隊の様な格好で武装した詳細不明の謎の人物。洞窟内部で偶然カイル達と遭遇。暗視ゴーグルを装着しており素顔は見えないが、戦闘能力はカイル以上の実力。

【エディー】

失踪事件調査のために投入された特殊部隊メンバーの隊長。カイル達と遭遇した時は、化け物に襲われて深い傷を負っていた。

【メアリ】

行方不明になっていた少年たちの1人。洞窟で1人さまよっていた所を、搜索に来たエディー達の部隊が発見し、保護される。

【村の老婆（テリ婆さん）】

村で1番高齢の女性。今回の事件は、古くから村に代々云い伝えられて来た【山に住み着く白い悪魔】の仕業だとカイル達に忠告する。

プロローグ

ここはアメリカ合衆国首都、ワシントン。

無数の高層ビルが立ち並び、ホワイトハウス、ワシントン大聖堂、連邦議会議事堂、ジョージタウン大学などの建物が有名な都市である。

街には500万以上の人間が生活しており、周辺地域の労働者および居住者を含めると800万以上もの人々がこの街を闊歩していることになる。

その日、ワシントンは生憎の曇り空で、今朝から小雨がパラついていた。

カイル・バートンはある建物の正面ゲート前まで歩み寄った。その建物は周囲を黒の鉄柵が囲み、正面の門には嚴重に武装した警備員が4名立っていた。

「おはようございますバートンさん。」

警備員の1人がカイルに声を掛けた。

カイルはニコツと微笑み、愛想良く警備員の挨拶に声を返した。

「ああ、おはようトム。なんだか今朝はうつとうしいな。」

「まったくですね。天気予報では雨は降らないと言っていたのに。」

カイルは黒の折りたたみ傘をバサツと仕舞うと、タイトなグレー色のスーツの内ポケットから1枚のIDカードと取り出し、それを警備員のトムに差出してやった。

「はい、お預かりします。」

そう言うとトムはカイルのIDカードを丁寧に受け取り、自らの首にぶらさげている小さなスキャナーにIDカードをかざした。スキャナーからピピツという小さな機械音が鳴ると、トムはカイルにIDカードを返却した。

この音が、カイルの持つIDカードが本物であることを証明するというわけだ。

「ご苦労様。」

カイルはIDカードを受け取るとトムにねぎらいの言葉をかけて、正面ゲートの門をくぐった。

ここがカイルの職場、アイゼンハワー政府ビルである。

【ビル】と言っても、街のあちこちにそびえ立つガラス張りのそれとは違い、ゴシック調の古い洋館の様な佇まいの建造物だ。

カイルが建物の中に入ると、すぐさま若い女性と男性が歩み寄ってきた。2人ともまだ20代半ばでカイルよりも若いが、国家エージェントとして今年から採用された信頼できる部下である。

「おはようございますカイルさん。」

「おはよう。ジェーン、セス。」

ジェーンはパラパラと書類をめくって、今日のカイルの予定表を確認している。

セスはカイルの鞆や荷物を一式受け取ると、職員専用の保管スペースに持っていった。

「ジェーン。今日はたしか【秘】レベルの任務が1件あったんだっ
たかな？」

「はい。さきほど局長がカイルさんを会議室に連れてくるようにと
申しておりました。」

国家秘密エージェントというのは、アメリカ合衆国が秘密裏に、も
しくは公けに一般公開する事によって国家に危険を与える可能性がある
ある事件や情報収集を担当する機関である。

新人のエージェントはランク付きの先輩エージェントの秘書兼、書
類整理などを行うのが仕事である。

また、新人エージェントが極秘任務遂行や現地調査などに介入がで
きる様になるには、それなりの下積み経験と、上司のエージェント
の推薦によるものが多い。

カイルは、セスが持ってきたホットコーヒーを受け取ると、ジェー
ンの説明を一通り聞き終え2人を局長室のドアの前で待機させた。

カイルが局長室のドアを軽くノックすると、すぐさまドアの向こう
から声が聞えた。

「はいりたまえ。」

「おはようございます。局長。」

カイルは新人の2人をドアの前に残して、局長室に入った。この局
長室でエージェント達はこれから与えられる様々な任務の説明を受
ける。とりわけ、この部屋に直接出入りすることが許されるのはラ
ンク付きのエージェントのみだが、カイル・バートンは機関の最重
要エージェントの1人として数えられる立場にあった。

ランク付きとは、数字1～10に置き換えられた優秀な10名に与えられる称号で、カイルはナンバー4の称号を持つエージェントである。

数字の大小による上下関係はなく、1～10までの称号を持つエージェント全員が最重要エージェントとして、時には生死に関わるような危険な任務を遂行することになる。

カイルが局長室に入ると、立派な口ひげを蓄え、左目に刻まれた大きな古傷が印象的な威厳に満ちた男性がデスクに腰掛けていた。彼がこの機関の最高責任者であるトーマス・ランファン局長だ。

「おはようカイル。さっそく本題に入ろうか。もう秘書の若いのから一通り聞いていると思うが、秘レベルの調査任務が1件、君に言い渡された。」

「ええ。調査対象は西部地方の小さな村の行方不明者だとか？」

国家エージェントに与えられる任務には3種類の機密レベル分類システムが設けられている。

1、最高機密 (Top Secret) セキュリティーレベル3。情報の内容または情報の収集手段が一般公開されると国家安全に絶大な損害を与えるもの。最高機密扱いになる書類は少ない。

2、極秘 (Secret) セキュリティーレベル2。一般公開されると国家安全に深刻な損害を与えるもの。大部分の資料は極秘扱いになっている。

3、秘 (Confidential) セキュリティーレベル1。一般公開されると国家安全に損害を与える可能性のあるもの。

の三段階に分類され、これらの情報を閲覧するにはクリアランスが要求される。クリアランスは、それぞれのセキュリティレベルに見合うだけの身上調査を受けて潔白であることが証明された者にのみ発行される。とくに暗号理論、軍事衛星、諜報活動、核兵器に関わる者については更に厳しい調査が行われる。

今回カイルに与えられたのはレベル1の【秘】任務である。これらの任務を担当するのはランク付きエージェントの中でもさらに卓越したエージェントのみである。

「我々の元に届いた情報によると、先月からスウェーデンにて周辺の入った現地住民6名が次々と行方不明になっているそうだ。また、現地調査に入った州警察の特殊部隊員5名も行方不明になったとの事だ。どう思う？」

「そうですね・・・特殊部隊まで行方不明となると、おそらくはただの遭難ではないでしょう。捕食性の野生動物など襲われたか。もしくは何らかの事件、事故に巻き込まれた可能性が高いと思います。」

カイルは左手で口元を撫でながら、手渡された書類を真剣に見つめた。

手元にあるちっぴけな紙切れに記載されている情報を読む限りでは、行方不明になった村人達や特殊部隊員に共通点はなさそうだが、さらに細かい情報は現地で聞き込むしかなさそうだ。

カイルは局長室を後にすると、すぐさま秘書の2人に出発の準備を頼んだ。

「セスはリストにある装備品を用意しておいてくれ。ジェーンはすぐさま飛行機の手配を頼む。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7517h/>

パニック

2010年10月9日21時57分発行